

【原 著】

幼児歌唱曲の速度感の傾向と課題

高須 裕美

Current Trends and Future Issues Related to Song's speed
in the Preschool-Elementary Cooperated Education Research

TAKASU Hiromi

2025

岡山大学教師教育開発センター紀要 第15号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.15, March 2025

幼児歌唱曲の速度感の傾向と課題

高須 裕美※1

本研究では、音楽教育的観点から幼児歌唱曲の選定のあり方を検討した。その際、小学校の音楽教育で歌唱共通課題として挙げられてきた教材を比較対象とし、その傾向と課題を考察する。1つ目は曲の速度感において歌唱共通教材と選定頻度の高い幼児歌唱曲の平均的な速度において、どの程度の差があるのかという調査を行った。2つ目は、幼稚園と小学校音楽科で共通して用いられる教材曲の作曲された年代の違いについて明らかにした。この2つの調査を用いて、歌唱共通課題に選定されている曲の速度感から現代の子どもの歌の速度感の傾向を明らかにした。この結果から幼稚園教育における幼児歌唱曲のチャートを作成することによって、伝統的に歌い継がれてきた幼児歌唱曲の再考の可能性を示した。

キーワード：幼保小連携，子供の歌の速度感，子供の歌文化，伝統音楽

※1 岡山大学学術研究院教育学域

I 問題と目的

子供の遊びについての問い直しが議論されている^{註1}。坂井(2010)は、日常生活の中で見られる子どもの繰り返される遊びの姿から、子どもの遊ぶことと歌うことは、「自然な結びつきを持っている」と述べており¹⁾、近年では、歌うことは、子供の語彙力発達の1つの要因であることも報告された²⁾。幼少期に歌い続けた歌詞やメロディは、子供の音楽的アイデンティティ(個性)を育み、子供の記憶や感覚として生涯に亘って心に残るものになる。したがって保育者がどのような歌を取り入れるのかということは、子供の遊びと同様に、何をどのように教えていくのかという文化的伝承の要素を持つ。2017(平成29)年度『幼稚園教育要領』「環境」には、2 内容(6)において「日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ」³⁾と記載された。このように我が国の教育は、文化や伝統を継承するという使命感を背景に持ち、子供が様々な音楽経験を積んでいけるような指導計画を立案することが求められている。それを専門性として捉えることは、小中学校教育のような共通教材を持たない幼児教育であるがゆえに、重要な課題であると言える。では、幼児教育の実践者は、文化の伝承者として、どのような音楽を選択し、音楽活動に取り入れていくのか。

大人と子供の歌唱曲が競合する音楽文化⁴⁾の中で、子供の歌う姿の理解の有りに加えて検討が必要な課題は、保育における歌唱曲の選定である。子供は、

乳児の頃から映像の刺激を移動中や外出先でも視聴している。テレビやデジタル機器を使った映像は、スマートフォンなどの普及にも伴って、子供の日々の生活に深く入り込んでいる。2015年のベネッセ教育総合研究所の、首都圏の0歳6か月～6歳就学前の乳幼児をもつ保護者4,034人を対象にした調査では、1日に2時間以上テレビを視聴している乳幼児は5割、さらにビデオ・DVD・ハードディスクレコーダーは2割であった。この調査から、視聴できるメディア媒体に、スマートフォンとタブレット端末が項目に加わり、数値も上がった。また、この調査では、低年齢の未就園児の31.7%は家庭での視聴時間が2時間以上であることも明らかになった⁵⁾。つまり、子供は「子供向けの音楽」に限らず、あらゆる媒体から多種多様な音楽を聴いており、これらのデータは、子供の音楽的な発達や技能の獲得に大人がどのように関わっていくのかを示すべきであること示唆している。

一般に曲の難易度は、音域の広さとリズムの難しさを見ながら判断されることが多いが、これまで幼児歌唱曲の難易度に関して具体的な提示がなされてこなかった。保育者の主観的意図によって、音楽的な発達とは関係ない視点で選曲された幼児歌唱曲選曲の実態に関する論考(白石, 2000)⁶⁾、歌唱曲は平易なリズムのものから段階的に進んでいくべきであることが指摘される報告も見られる(樋口, 2016)⁷⁾。現代の新しい子供の歌は、楽曲としての複雑さを増し、わらべ歌を始めとする日本の伝統的な歌とは大きくかけ離れたリズムや旋律の特徴を持っている。しかしながら、そのことを把握し、保育者が適切なねらいを持って歌を評価し選曲するような指標を示すために必要な課題は、保育者が歌唱曲の難易度をどのように捉えて理解するかという点である。

以上のような考察を前提に本論では、幼児歌唱曲の楽譜と小学校歌唱共通教材に記載されている速度感に焦点を当て、3歳以上児の歌詞のイメージに関する言語的発達や音楽的な発達を加味しながら、幼保小連携教育において情操教育の基盤となる保育で使われる定番曲を捉える新たな枠組みの構築を目的とする。

ここで用語を統一する。これまでの論述でも既にそうしてきたが、本論では、子供が幼稚園、保育園認定こども園などの未就学施設で取り扱う保育に使われている歌を「幼児歌唱曲」と定義する。また、本論では、3～6歳児を「子供」と表記する。

II 方法

1 小学校の歌唱共通教材における速度指定

まずは、2020(令和2)年度用小学校音楽科教科書を分析対象としてみよう。小原光一・飯沼信義・浦田健次郎(監修)(2020)『小学生の音楽』教育芸術社、及び新実徳英(監修)(2020)『音楽のおくりもの』教育出版が調査対象であり、いずれも1～6年生すべてを用いる。現行の小学校学習指導要領の第2章第6節音楽では、「共通教材」が指定されている。これは「教材として扱うべき特定の楽曲名」を指す。本研究では教科書教材の中から、共通教材のみを抽出して、

速度記号を抽出する。

第一学年の「ひらいたひらいた」48, 第三学年「うさぎ」Lento=50-55, 第四学年「さくらさくら」69, に関しては, 正確な速度を記載していないため, 3~5曲の一般公開視聴覚録音データ, 録画資料から速度を図り, 平均的な数値を設定する。第六学年「越天楽今様」に関しては, 徳丸吉彦らのDVD資料^{註2)}を速度資料とし, 速度を設定する。

2 幼児歌唱曲の選定

次に, 幼児歌唱曲の選定を検討したい。『幼稚園教育要領』には, 具体的な曲名の記述はなく, 使用頻度の高い歌唱曲は, 複数ある市販の教材曲集に監修され, 収録されている。Mizusaki & Takasu (2017) による幼児歌唱曲と小学校教科書の重複における研究⁸⁾を参考に, 本論では, 2010年以降発行に販売されている教材曲集12冊を収集し, 6冊以上で収録されている曲を幼児歌唱曲とする。

本論で使用する選定頻度の高い幼児歌唱曲は, 計66曲である。この中で, 速度指示が記載されていないものは, 除外する。また, 出版社や編曲者によって速度記号指定されているものがあることが明らかであり, その場合は複数の速度指定の平均値を設定する。Lento (J=50-55) や Allegro (J=120-151) などの速度標語も, 平均値を数値として抽出する。また, 表記を統一するため, 速度記号は Beat per minute とする (以下, 略して BPM と表記する)。

3 速度感における幼小共通教材の分析方法

得られたデータを基に, 先ず, 小学1~6年生の歌唱共通教材の平均的な速度指定と, 先述の頻度の高い幼児歌唱曲の速度指定の平均を比較した。次に, 幼児歌唱曲が発表された年代を明治~平成に分類し, 時代に即して速度がいかに変化しているのか, そして幼児歌唱曲集には, どの時代の歌唱曲を選定したものが多く選定されているのかを分類した。

Ⅲ. 結果および考察

表1・表2に基づいて, 幼稚園と保育園と認定こども園を含む, 未就学児施設における幼児歌唱曲と小学校歌唱共通教材の速度感の比較し, 小学校の歌唱共通教材との選曲の関係について調査する。次に, 歌唱曲の作曲された年代から, 未就学児施設と小学校が採用している歌の発表年について比較する。さらに, 子供の音楽的発達に関する先行研究から, 表3を基に集団での歌唱活動における幼児歌唱曲の選定について, 保育者の専門性を促す指標となるデータベースを提示する。

1 速度感の速い幼児歌唱曲の傾向

小学校歌唱共通教材の BPM=91 (表1) と幼児歌唱曲の BPM=107 (表2) にそれぞれの速度指定の詳細を記載した。

表 1. 小学校歌唱共通教材 (BPM 平均:91)

学年	曲名	BPM
第一学年 中央値 ^{註3)} :93	かたつむり	92
	うみ	88-100
	ひのまる	104
	ひらいたひらいた	54-48
第二学年 中央値:98	夕やけこやけ	84
	春がきた	120
	かくれんぼ	112
	虫のこえ	80
第三学年 中央値:96	春の小川	104
	うさぎ	52
	ふじ山	96
	茶つみ	104
第四学年 中央値:92	さくらさくら	76
	もみじ	92
	とんび	92
	まきばの朝	132
第五学年 中央値:98	こいのぼり	96
	冬げしき	100
	子もり歌	60
	スキーの歌	120
第六学年 中央値:80	おぼろ月夜	80
	われは海の子	126
	ふるさと	80
	越天楽今様	40

表 2. 幼児歌唱曲全 66 曲一覧 (曲名, 掲載冊数) BPM 平均:107

10 冊掲載 (N=15) 中央値 102		せかいじゅうのこどもたちが	132	7 冊掲載 (N=11) 中央値.:115	
あわてんぼうのサンタクロース	120	てのひらをたいように	108	おかえりのうた	126
いちねんせいになったら	103*	ぶんぶんぶん	104	おなかのへるうた	112
うみ	88	まつぼっくり	84	グーチョキパーでな	92

幼児歌唱曲の速度感の傾向と課題

				につくろう	
うれしいひなまつり	69	南の島のハメハメハだのおう	128	クラリネットをこわしちゃった	86
おおきなふるどけい	108	むすんでひらいて	104	こぎつね	96
さよならぼくたちのほいくえん	83	8冊掲載 (N=16) 中央値 104.9		てをたたきましょう	118
さんぼ	120	あめふりくまのこ	104	ぼくのミックスジュース	136
たなばたさま	126	いぬのおまわりさん	104	メリーさんのひつじ	86
チューリップ	92	おつかいありさん	103*	ゆうやけこやけ	84
どんぐりころころ	60	おててをあらいましょう	10 3*	ゆきのペンキ屋さん	94
とんぼのめがね	100	おにのパンツ	10 3*	ゆげのあさ	112
ふしぎなポケット	112	おはながわらった	76	6冊掲載 (N=11) 中央値 112	
めだかのがっこう	108	おべんとう	115	アイスクリームのうた	121*
やまのおんがくか	96	きのこ	108	しあわせならてをたたこう	116
ゆき	102	せんろはつづくよどこまでも	120	すうじのうた	115
9冊掲載 (N=13) 中央値 102		そうだったらいいのにな	112	たこのうた	112
アイ アイ	92	たきび	60	とけいのうた	102
あくしゅでこんにちは	120	とんでったバナナ	132	ドレミのうた	103*
おおきなくりのきのしたで	104	バスごっこ	126	ドロップスのうた	96
オバケなんてないさ	102*	ハッピーバースデートゥーユー	85	にじ	86
おもいでアルバム	70*	ビリーブ	96	にんげんっていいな	136*
かたつむり	92	むしのこえ	80	まっかなあき	120
きたかぜこぞうのかんたろう	123	やぎさんゆうびん	120	もみじ(文部省唱歌)	92

* Moderato (76~96) は中間の 86 と設定し, Allegro (120~152) は 136, Andante (63-76) 70 とした。

ここから幼児歌唱曲の方が小学校歌唱共通教材よりも, BPM で 16 速度感の速い選曲の傾向があることが判明した。この差は, メトロノームで示すと Moderato (♩=76-96) と Allegretto (♩=96-120) の違いである。主な速度標語と目安となるテンポは, 速度感覚を分かり易く表記する日本語表現として,

Moderato は「歩くような速さで」と記載し、Allegretto は「やや快速に」と示される。小学校で使用される歌唱教材は共通教材だけではなく、速度感のある小学校歌唱教材を総合的に網羅すると、その差は縮まってくるのが推察されるが、このリストに挙げた共通教材においては、文部省唱歌や大正時代の童謡などが指定されており、伝統的な歌唱曲を基盤にした内容を収集している。第二次世界大戦以前の日本で歌われた文化的な遺産であるとも言える。

阪井ら (2012) は、これらの曲は歌詞が難解であったり、児童生徒の生活感覚とかけ離れたものもあると指摘しており、教材として扱うにはかなりの工夫が必要であると述べ、移調したり、二部合唱に変えたりすることなど、多少のアレンジを提示している⁹⁾。

これらの歌唱共通教材の速度を羅列してみると、第四学年の「まきばの朝」は BPM130 で特に速度感が速いが、24 曲中 16 曲は Moderato のものが占めている。このような「歩くような速さ」である速度感覚であるからこそ、歌詞を明朗に歌い、動物や鳴き声の歌詞を振り返り、その意味を教師と子供が味わいイメージすることができるのではないかと考えられる。

表 2 には、幼児歌唱曲の使用数と速度をしている。全体的にテンポの速い曲が多く使用されている。10 曲掲載の幼児歌唱曲の中には、15 曲中 7 曲が「歩くような速さで」とされる Moderato (BPM: 86) を使用しているが、7 曲掲載の幼児歌唱曲では、11 曲中 2 曲であり、6 曲掲載の幼児歌唱曲では 11 曲中 1 曲のみであった。Moderato よりも遅い速度感を持つ歌唱曲は 66 曲中 21 曲使用されている。つまり、幼児歌唱曲として使われている多くの歌の 3 分の 2 以上は、Moderato 以上の速度感のあるアップテンポの曲を採用しているということである。

どのような曲を選曲し、どのような活動内容によって展開するのかというのは、教師や保育者に委ねられている。その一方で授業の教材選択について、小学校では基本的には教科書に掲載された曲集の中から選曲されるのに対し、保育者は、季節や生活に相応しい曲を教材曲集やわらべうた、伝承遊び歌など、幅広い選択肢から子供に口承で紹介し、繰り返し歌うことや生活と関連付けながら、聴く活動と歌う活動を繰り返すことによって歌唱曲を伝えていくという相違点がある。未就学児は、聴こえてくるリズムに反応して身体を活発に動かしやすい音楽発達段階であることも関連して、保育者は一般的にリズム感のある曲を好んでいることが多いのではと考えられる。

この小学校歌唱共通教材と幼児歌唱曲における速度感の違いは、時代による音楽的嗜好との関連を示す必要がある。そこで、楽曲発表された時代を図 1 に分類した。

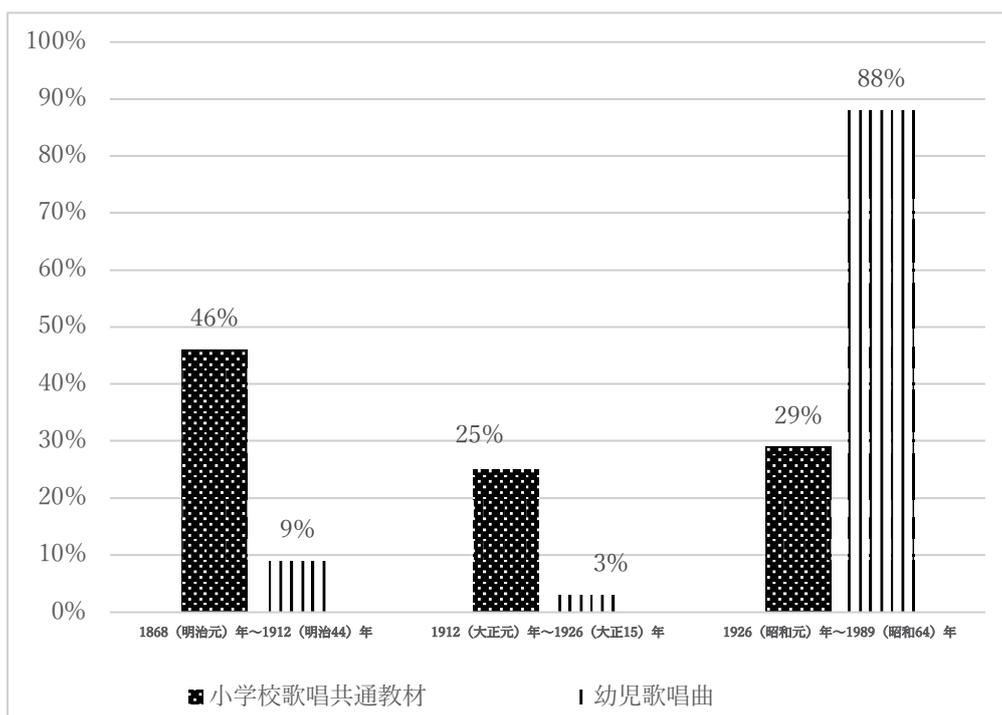


図 1. 時代別幼児歌唱曲における推移

2 歌唱曲選曲の時代別分類比較

(1) 昭和以降の保育歌唱曲への音楽的嗜好

図 1 から、小学校歌唱共通教材と幼児歌唱曲の発表年の推移から、多くの幼児歌唱曲は、昭和以降のものを採用する傾向に偏っていることが分かる。つまり、幼児歌唱曲では、未就学施設において、多くのテンポの速い曲を選曲して歌っており、現代の歌を多く選曲している傾向がある。日本の子供の歌は、大人文化と混在しているだけでなく、アップテンポの選曲傾向が加速化していると指摘できる。音楽のリズム理解について、太田ら (2015) は、4 歳の子供は、シンクペーションのように拍子カウントとずれる複雑なリズムについては早く理解し真似することができるが、二分音符のような長音では、他の音を聴きながら打つリズムとして表現するまでに時間がかかることを明らかにしている¹⁰⁾。多くのアップテンポな曲を歌う子供のリズム感覚は、リズムが複雑でノリの良い音楽に大きく刺激を受け、順応している可能性がある。他方、伝統的な日本の音楽に多くある速度感の落ち着いた音楽を経験する機会が減ることが懸念される。

例えば、日本のわらべ歌は、言葉の抑揚や流れに即した歌を多く持ち子供の遊び歌として保育実践で伝承されている。Z. Kodály [1882-1967] は、それぞれの民族の音楽を歌うことを起点にして、音楽経験を広げていくことを 1 つの理念に掲げ¹¹⁾、リズムの難易度に関する指標を示している。また、子供を対象にした歌の実践活動は、指導者の声や遊び歌を子供が聴くことにより、音やリズムの要素を経験的に教授している。さらに、未就学児のリズム課題は、四分音

符と八分音符の組み合わせのリズムが含まれる楽曲を選択することが段階的な目的のある適切な教示方法であるとした。明治以降の幼児歌唱曲でも、この指標に合う平易な曲を見つけることは難しいが、昭和後期以降の速度感のある曲を中心に選曲することは、歌から獲得できる日本語の持つ単語のイメージや、オノマトペのような固有な音の語感を豊かに味わう経験を軽んじて伝えられることも考えられる。絵本や言葉のやりとりにおいて、子供は言語的な性格や面白さを楽しむ経験を積み重ねているが、歌唱曲においても、周囲の大人が言葉とリズムを大切に伝える重要性に気付き、具体的で実践的な保育内容のアイデアを充実させることが必要である。

(2)速度感の落ち着いた感覚を持つ幼児歌唱曲の検討

そこで筆者は、新たに検討すべき幼児歌唱曲の選曲に4つの条件を設定した。第1は、先に分析した速度感のデータから適度な速度感を *Allegretto* (♩=96-120) までとした。第2に、Z. Kodály のリズムに関する指摘を参考に、日本語の言葉を味わうために四分音符と八分音符で構成された曲であることとした。第3に、吉富¹²⁾と水崎¹³⁾の研究結果を参考に子供の声の音域が広過ぎないものを中心にリストを1点トから2点ニを範囲として設定する。第4に、子供が歌詞を覚える曲の長さを16小節と設定して考慮し、それ以上長い曲は除外した。また、先述した幼児歌唱曲の12冊の曲集以外に、この4つの条件に合ったわらべうた・唱歌・童謡を新たに選定するために、『こどものうた』(ばら社)『童謡・唱歌・わらべうた』(新星出版社)を追加資料とする。

このリストには、保育内容「言葉」と、国語教育、発達心理学を専門分野とする協力者3名からの意見を反映させた。現在のところ、リストの曲数は多いとは言えないが、引き続き曲の抽出を増やし、リストを拡大していく予定である。年齢別に分けているが、同じ年齢であっても4月時点で学級には、3歳1か月～4歳1か月の子供がおり、月齢差があるため、3歳児のリストは3～4歳児、4歳児のリストは4～5歳児、5歳児も同じく5～6歳児の子供をというように年齢に幅を持たせて検討したものが表4である。

幼児歌唱曲の速度感の傾向と課題

表 4. 幼児歌唱曲リスト

	曲名	作詞者	作曲者	音域への配慮	速度	選曲のねらい	作品発表年
	ほたるこい		わらべうた	開始音をうに設定	指定なし	4つの音の要素で構成する	不明
	げんこつやまのたぬきさん	香山美子	小森昭宏		指定なし	4つの音の要素で構成する	不明
	なわとびあそび		わらべうた		指定なし	3つの音の要素で構成する	不明
	たけのこいつぼんおくれ		わらべうた		指定なし	3つの音の要素で構成する	不明
	かごめかごめ		わらべうた		指定なし	集団遊びの中で取り入れる	不明
	月	不明	不明		88	年中行事に取り入れる	1910 (明治43) 年
3-4	鳩	不明	不明		96	口語が歌詞になっている	1911 (明治44) 年
歳	たこの歌	不明	不明	ハ長調に移調する	112	生活や遊びに関連して取り入れる	1910 (明治43) 年
	どんぐりころころ	青木存義	梁田貞		60	8小節の短い物語の歌詞を経験する	1921 (大正10) 年
	こいのぼり	近藤宮子	小出浩平		120	3拍子系の音楽経験ができる	1931 (昭和6) 年
	ぞうさん	まどみちお	團伊玖磨		Moderato	3拍子系の音楽経験ができる	1951 (昭和26) 年
	おうまのおやこ	林 柳波	松島つね		112	全体の7/8は、四分音符で構成されている	1941 (昭和16) 年
	チューリップ	近藤宮子・井上武士	井上武士	ハ長調に移調する	92	園生活の中で花を見る場面が想定される	1932 (昭和7) 年
	まつぼっくり	広田孝夫	小林つや江	ハ長調に移調する	84	生活環境の中で見た花から歌詞を想像する	不明
	たなばたさま	権藤花代・林 柳波	下総統一	ハ長調に移調する	120	全体の3/16は、四分音符で構成されている/年中行事を知る	1941 (昭和16) 年
	とけいのうた	筒井敬介	村上太郎	ハ長調に移調する	60	時間の学びにむけた曲として取り入れる	1953 (昭和28) 年
	雀の学校	清水かつら	弘田龍太郎	ハ長調に移調する	108	連続する2点ハの経験・「学校」への興味を育てる	1921 (大正12) 年
	金魚の昼寝	鹿島鳴秋	弘田龍太郎	ハ長調に移調する	不明	生き物の様子や色を観察したり想像したりする思考を育む	1919 (大正12) 年
4-5	春よ来い	相馬御風	弘田龍太郎		90	季節への意識	1923 (大正12) 年
歳	靴が鳴る	清水かつら	弘田龍太郎	ハ長調に移調する	104	「みんな」という歌詞によって仲間同士の関係への興味を広げる	1919 (大正8) 年
	ふたあつ	まどみちお	山口保治	ハ長調に移調する	Moderato	数字や形・体の部位への興味関心を持つ	1937 (昭和12) 年
	大きなたいこ	小林純一	中田喜直		56	大小の違い、強弱の違い、声や身体表現による表現力を育てる	1952 (昭和27) 年
	めだかの学校	茶木 滋	中田喜直		108	生活環境で見る生き物の様子を観察したり、想像したりする	1951 (昭和26) 年
	シャベルでホイ	サトウハチロー	中田喜直		112	日常生活で見る事ができない生き物の暮らしを想像する	1953 (昭和28) 年
	おつかいありさん	関根栄一	團伊玖磨		106	鳩の様子を想像し、弾んだリズム(付点の音符)を経験する	1950 (昭和25) 年
	七つの子	野口雨情	本居長世	ハ長調に移調する	108	応答性のある歌詞や、2小節にまたがる長いフレーズを経験する	1928 (大正17) 年
	背くらべ	海野厚	中山晋平	ハ長調に移調する	96	3拍子の音楽を経験する。年中行事(子供の日)の歌詞を味わう	1923 (大正12) 年
	肩たたき	西條八十	中山晋平		88	家族への思いやりを描いた歌詞を歌で想像する	1923 (大正12) 年
	黄金虫	野口雨情	中山晋平		58	韻を踏むような言葉遊びを経験する	1923 (大正12) 年
5-6	シャボン玉	野口雨情	中山晋平		72	シャボン玉の描写や気持ちを歌詞で学ぶ	1922 (大正11) 年
歳	みかんの花咲く丘	加藤省吾	海沼実		78	手合わせ遊びを伴いながら歌を学び、6/8拍子の曲を経験する	1946 (昭和21) 年
	思い出のアルバム	増子とし	本多鉄磨		Andante	季節ごとに一年中を思い出しながら想像する	1980 (昭和55) 年
	かわいいかくれんぼ	サトウハチロー	中田喜直		104	強弱の表現や、ささやくような歌い方を自分なりに楽しむ	1951 (昭和26) 年
	山羊さんゆうびん	まどみちお	團伊玖磨		120	絵本のような物語を歌の中で経験する	1939 (昭和14) 年
	びわ	まどみちお	磯部淑		88	3拍子の音楽を経験し、季節の食べ物を知る。	1958 (昭和33) 年
	数字の歌	夢虹二	小谷肇		110	数字への興味関心を広げる	1957 (昭和32) 年
	いちねんせいになったら	まどみちお	山本直純		110	学校への希望と新しい人間関係への興味関心を深める	1966 (昭和41) 年
	ふしぎなポケット	まどみちお	渡辺茂	ハ長調に移調	112	食べ物への興味と、速度感の変化を経験する	1953 (昭和28) 年

* 「音域への配慮」欄の空欄は、原曲の音域でも歌唱可能であると記載していない。

IV. 総括と課題

本研究の目的は、現代の子供の歌の速度感に関する選曲における課題を明らかにすることであった。子供が家庭で好んで歌う歌が、大人の音楽文化と重なるようなリズム感を持つものも存在する。しかし、幼児歌唱曲は、子供のリズム理解や言葉を理解して歌う観点から、とりわけ演奏することを目的とする場合、平易なものから順序立てて行われるべきである。また、幼児歌唱曲と小学校の共通教材の歌唱曲の速度感の違いを明らかにし、幼児歌唱曲リストから時代別に分類することによって、共通教材と幼児歌唱曲の速度感の違いの根拠になる選曲の背景も示した。

2018（平成30）年度の『幼稚園教育要領』の改定で、幼稚園教育においても文化的継承の役割を持つことが加えられたが、『教育基本法』においても、第二条の第五項において「文化伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」と記載がある¹⁴⁾。したがって、幼保小の教育において、文化的な歌の価値とそれが子供によって、遊びの中に再構成されるような素材として、大人が選曲を見直す必要がある。また、小学校での指導計画には、未就学施設よりも具体的な内容が記載され、感じるものと学ぶことが含まれる。例えば、「歌のリズムを楽しもう」が、小学校では、「歌を拍にのってからだで感じよう」という文言として具体的に記載されている。第1学年における指導目的を新しい学びにするために、子供の歌に関する指導を考えていくのだとすれば、歌も伴奏も高度なリズムや速度感による歌唱曲を繰り返し歌う選曲よりも、「高い-低い、速い-遅い、長い-短い」といった子供の「基礎的な音楽感覚」に焦点を絞った音楽的経験に定めるべきであろう。具体的なリズムや音域の指標が示されないまま保育者の主観によって選曲されることにより、子供が歌を間違ったりリズムや音程認識のまま、音域の広い曲やリズムの複雑な曲を歌い続けることも考えられる。したがって、選曲においては、大人が子供の言葉や音楽的な発達と歌を教える意味を教育者として深く考えられるような保育者養成が求められる。

今後も、音楽的嗜好や子供のノリに合わせて、早口言葉のような細かいリズムや複雑なリズムが、子供の歌に多く現れてくることが予想される。そういった音楽文化の背景から、子供の複雑なリズムに対する理解度は増す可能性がある。しかし、現代の日本の子供が、替え歌や言葉遊びとして再構成した遊びとして楽しめるような、日本語の抑揚に則した幼児歌唱曲、平易なリズムの理解度の指標になるような教材のリストについて、検討する余地があるであろう。

参考・引用文献

- (1) 坂井康子（2010）遊び歌の指導をめぐる諸問題, 音楽教育実践ジャーナル, vol.8.No.1, 68.
- (2) Linnavalli, T., Putkinen, V., Lipsanen, J., Huotilainen, M. & Tervaniemi, M. (2018) *Music playschool enhances children's linguistic skills*. Scientific

Reports, 8: Article number 8767.

(3) 内閣府・文部科学省・厚生労働省(2017)平成 29 年告示幼稚園教育要領・保育所保育指針, チャイルド本社.

(4) 小林美実 (2002) 幼児の表現, その考え方と教育法, 保育学研究, 40(1), 104-113.

(5) ベネッセ教育総合研究所「第 5 回幼児の生活アンケート」の 2015 年調査, https://benesse.jp/berd/jisedai/research/detail_4770.html (2024 年 10 月 22 日)

(6) 白石昌子 (2000) 幼稚園教額の音楽教材の選択規準に関する調査研究 福島大学教育実践研究紀要第 39 号, 89-94.

(7) 樋口しずか (2016) 子どもの歌唱の現状 : 日本語の「ことば」と音高に着目して, 山梨県立大学人間福祉学部紀要(11), 41-52.

(8) Mizusaki, M. & Takasu, H. (2017) Fundamental Study of Kindergarten-Elementary School Cooperative Music Education in Japan: An Analysis of Elementary School Music Textbooks, *Asia-Pacific Society of Music Education and Research Proceedings*, 293-300.

(9) 阪井恵・有本真紀 (2012) 初等音楽科教育法. 明星大学出版部, 193-228.

(10) 太田早津美・高須裕美 (2015) 楽器遊びと指導法について考える—4 歳児のリズム理解と演奏行為を考察する—, 第 68 回日本保育学会論文要旨集, 66.

(11) International Kodály Society

<https://www.iks.hu/index.php/home1/the-kodaly-concept> (2024 年 10 月 3 日)

(12) 吉富功修 (1980) 幼児の声域と幼稚園歌唱曲の関連について 愛媛大学教育学部紀要第一部教育科学 26, 137-148.

(13) 水崎誠 (2002) 幼児・児童の声および声域の発達 —先行研究の検討を通して—, 広島大学大学院 教育学研究科音楽文化教育学講座 音楽文化教育学研究紀要, XIV, 113-128.

(14) 文部科学省 (2017) 小学校教育指導要領(平成 29 年告示)解説総則編, 179.

註 1) 「発達」179 (2024) においては, 【特集】あそぶが生まれ, 11 編の論考が掲載された。

註 2) 徳丸吉彦 監修「唱歌で学ぶ日本音楽」音楽之友社, 2019 における DVD 「越天楽」の実践から実際のテンポを抽出した。

註 3) 中央値の場合は, 曲のリストに速すぎる歌唱曲や遅すぎるものがいくつ含まれていたとしても, ほとんど影響を受けない。

付記 : 本研究は, JSPS 科研費(23K02326)の助成を受けたものである。

Current Trends and Future Issues Related to Song's speed in the Preschool-Elementary Cooperated Education Research

Hiromi TAKASU※1

Keywords: Preschool-elementary cooperation, Children's Song speed, Children's singing culture, Japanese traditional song materials.

※1Okayama University